

社会科（歴史的分野）学習指導案

1. 単元名「第3章 中世の日本 1節 武士の政権の成立」

2. 単元について

(1) 単元観

本単元は、中学校社会科学学習指導要領の社会科歴史的分野の2内容の「B近世までの日本とアジア」の「(2) 中世の日本」にあたり、「鎌倉幕府の成立、元寇（モンゴル帝国の襲来）などを基に、武士が台頭して主従の結び付きや武力を背景とした武家政権が成立し、その支配が広まったこと、元寇がユーラシアの変化の中で起こったことを理解すること」をねらいとしている。また、「武士の政治への進出と展開、東アジアにおける交流、農業や商工業の発達などに着目して、事象を相互に関連付けるなどして、アの（ア）から（ウ）までについて中世の社会の変化の様子を多面的・多角的に考察し、表現する」力や「中世の日本を大観して、時代の特色を多面的・多角的に考察し、表現する」力を身に付けることができるように指導することが求められている。

そこで、武士が台頭して、武家政権が成立し、その支配が広まるという、武家政治の成立の背景と推移を取り扱い、古代の律令国家や藤原氏による摂関政治と平清盛や源頼朝、北条氏などの武士による政治の共通点や相違点という観点から、古代から中世への時代の転換の様子を多面的・多角的に考察し、表現したりすることで、中・下級官人や貴族の家人（侍）だった武士がどのような過程を経て台頭し、主従関係や武力を背景とした武家政権を成立させ、その支配が広まっていったのかについて理解させたい。

中世とは、権力が分散したために自分のことは自分で守らなければならない（自力救済の）時代である。

それ以前の古代は、天皇中心の統一国家が形成されていく時代と言える。古代の日本は隋や唐を見習い、天皇を中心とした中央集権国家を目指し、律令制を導入した。中央では平城京や平安京などの都城が営まれ、議政官を核とした太政官を頂点に二官八省の官僚機構を設け、地方では国郡里（郷）の行政組織を編成し、中央官人を国司、地方豪族を郡司以下に組織した。また、戸籍や計帳を作成して班田収授を行い、租庸調や雑徭を徴収して全国の民衆を支配した。

しかし、律令国家が誕生して間もない8世紀中ごろには、すでに班田収授を行う上で基本となる口分田の不足が問題となり、それへの対処として100万町歩開墾計画や三世一身の法、墾田永年私財法が出されたが、その結果、貴族や大寺院による私有地拡大への道が切り開かれ、律令国家の大原則である公地・公民が崩れ始めた。そのため、桓武天皇は律令国家の立て直しに取り組み、蝦夷征討による領土拡大政策を行ったり、班田収授の6年1班を12年1班に改めたりして、班田収授の維持を図った。しかし、口分田の不足や班田手続きの煩雑さ、偽籍の増加などにより、班田収授は徐々に実施されなくなった。

延喜2（902）年、醍醐天皇は荘園整理令を出して、国司に租庸調の順守や班田の実施を命じ、皇族・貴族などの院宮王臣家が地方の有力者と結びついて荘園を増加させていた情勢を食い止めようとした。しかし、律令制的支配の遂行はもはや不可能な段階にあったので、この法令は結果的に律令制復活の最後の試みとなり、新たな段階への出発点となった。

政府は租税収入を確保するために租税の收取や軍事などの権限を大幅に国司に委譲し、自由に国内を

支配する権利を与えたので、現地に赴任した国司が国衙（国の行政機関）の最高責任者となり、受領として任国統治を行うようになった。また、8・9世紀から郡司一族やその出身者、土着国司など律令官人の経験者がその蓄積した富によって墾田開発や田地経営を行い、百姓への出挙（高利貸付）を行って富の集積を図るようになり、富豪の輩と呼ばれるようになった。

受領は彼らを積極的に目代や在庁官人として国衙の機構に取り込み、領地支配を加速させていった。その一方、受領によって活動を制限された富豪の輩は、上級貴族や大寺社に土地を寄進し、その名義の荘園にしてもらい、収穫の一部を差し出す代わりに保護してもらうようになった。受領たちは自分たちよりも上級の貴族や大寺社の名義になっている土地から税の徴収ができなくなり、受領たちの使者も立ち入りができなくなった。その結果、受領が支配する公領と貴族や大寺社が支配する荘園が全国に広がっていくことになる。（荘園公領制）

今まで見てきた班田収授の崩壊や律令制の行きづまりと変容は、社会の新しい階層である「武士」の成長を招いた。かつては税負担に耐えかね、逃亡した農民が盗賊になったり、朝廷が土地を管理しきれず、土地のトラブルが頻発したりする中で、農民たちが自衛のため武装し、集団化したのが武士（在地領主論）とされていたが、現在の教科書では「もともと弓矢や馬などの戦いの技術に優れた都の武官や地方の豪族たちで、朝廷や国府の役人になって、天皇の住まいや役所の警備、犯罪の取りしまりなどを担当した」のが武士の始まりとされている。また、皇位継承権を失って「平」や「源」の姓を与えられた皇族の子孫や、藤原氏の中でも貴族社会で出世できなかった者が、国司や盗賊などを鎮圧・逮捕する役職の押領使や追捕使などの職について地方に赴任した際に、土着の武装集団と結びつき、武士団を形成するようになった。

そのような中で頭角を現すようになってきたのが、桓武平氏と清和源氏である。彼らが平将門の乱や藤原純友の乱（承平・天慶の乱）を鎮圧し、武士の存在感を見せつけたことで、朝廷もこうした反乱を鎮圧するのに地方の武士団の力を借りざるを得なくなっていく。そして、遂には保元の乱や平治の乱のように皇族や貴族の争いが武士の力によって解決されるに至ったことで、武士はその存在感を大きく高め、その後の武士の世の中が訪れる転機となった。

平治の乱に勝利した平清盛は、日本で初めての武士の政権を成立させた。しかし、平氏政権は武力により政権を獲得したり、武士たちを地頭に任命したりするなど武家的性格を有した一方、清盛が太政大臣として政治を行ったり、安徳天皇の外祖父となったり、多くの荘園を支配するなど貴族的性格も有する政権であった。そのため、貴族や寺社だけでなく、武士の中からも不満を持つものが現れ、源頼朝や源義仲などが各地で反乱を起こした。

この戦いに勝利した頼朝が鎌倉幕府を成立させたが、頼朝は清盛とは違い、鎌倉幕府の役割を基本的に治安維持とし、摂関家や院、国司などの朝廷の仕組みも同時に残し、見た目は朝廷と幕府がともに日本を治めている形になっているのが特徴である。そのため、治安維持要員として全国に置かれたのが、守護と地頭であり、その守護や地頭に任命される御家人は将軍と土地を仲立ちとしたいわゆる御恩と奉公の主従関係で結ばれていた。

その後、源氏将軍は三代で終わり、北条氏が政治をリードしていくことになる。しかし、北条氏は御家人と主従関係にはないため、源氏との血のつながりのある者を将軍とし、自身は政所と侍所という政務と軍事の役所のトップを兼任する「執権」として政治を行っていくのである。

1221年の承久の乱に勝利した幕府は、西日本に勢力を広げ、朝廷の律令とは別に御成敗式目を制定し、

さらに武士の支配が拡大していくのである。

このように武士の支配が拡大していく中、保元の乱以降の相次ぐ戦乱や飢饉などが、いよいよ末法の世が広まったことを人々に感じさせたことで、鎌倉仏教が盛んに信仰されるようになった。鎌倉仏教は理解しやすい教えを説いたため、武士や民衆に一挙に広まっていたのである。

中世には、大きく分けると4つの特徴がある。まず、一つ目が自力による生存を求められた点である。二つ目は権力が統合されておらず、分権化の著しかった点である。三つ目が日本列島の各地に地域社会が形成され、それらが内的・外的な交流をへて成長していった点である。四つ目が神仏への信仰が著しかった点である。

そこで、本時では、これから約800年間の武士の世の学習を始めるにあたり、武士とはどのような存在なのかをとらえるための導入とする。生徒たちは、武士に対して殺人や戦いを仕事したり、それらによって権力を獲得したりしたというイメージを強く持っている。しかし、これは武士の一側面しか捉えられていない。また、このような存在に武士が成長していくのは、平安時代後期以降に政権内の争いが武力によって解決される時代になってからのことであり、初期の武士はそのような存在ではなかった。つまり、生徒の認識と現実の武士の存在との間にギャップが存在しているのである。そのため、本時では「平家物語絵巻」や「粉河寺縁起絵巻」「春日権現験記絵」などの絵巻物に描かれた武士の様子から武士の存在や社会的な地位を読み取り、武士が殺人者集団としての側面だけではなく、在地領主・土地の開発者・荘官など様々な側面をもった存在であるということに気づかせたい。そして、最終的に日本を支配した存在である武士が、最初は貴族の家人や中・下級官人のようなあまり地位が高くない身分の人々であり、社会的立場も弱かったことにも気づかせたい。

3. 単元の目標

- ・鎌倉幕府の成立など、武士が台頭して主従の結びつきや武力を背景とした武家政権が成立し、その支配が広まったこと、民衆の成長を背景とした社会や文化が広まったことを理解する。【知識及び技能】
- ・武士の政治への進出や鎌倉時代の産業の発達、文化の広がりに着目して、中世の社会の変化の様子を多面的・多角的に考察し、表現する。【思考力・判断力・表現力等】
- ・鎌倉時代の日本について、よりよい社会の実現を視野にそこで見られる課題を主体的に追究しようとする態度を養う。【学びに向かう力、人間性等】

4. 単元の評価規準

知識・技能	思考・表現・判断	主体的に学習に取り組む態度
○鎌倉幕府の成立など、武士が台頭して主従の結びつきや武力を背景とした武家政権が成立し、その支配が広まったことを理解している。 ○民衆の成長を背景とした社会や文化が広まったことを理解している。	○武士の政治への進出や鎌倉時代の産業の発達、文化の広がりに着目して、中世の社会の変化の様子を多面的・多角的に考察し、表現している。	○鎌倉時代の日本について、よりよい社会の実現を視野にそこで見られる課題を主体的に追求しようとしている。

5. 単元の指導計画 (全6時間)

●学習改善につなげる評価○評定に用いる評価

時	学習のねらい (○) と 指導の手立て (・)	評価規準	評価の観点			留意点 (評価方法)
			知識	思考	態度	
1 本 時	○武士の立場を、その役割に 着目して理解する。					
		武士とはどのような存在になっていくのだろう				
2	○平氏政権が成立し、また短 期間で終わった理由を理 解する。 ・保元・平治の乱の様子を絵 巻物から読み取らせる。 ・平清盛は、藤原氏と同じよ うに、朝廷との関係を深め て政治の実権を握ったこ とを理解させる。	・平氏政権が成立し、また短 期間で終わった理由を、上 皇、貴族、武士などの立場 から多角的に考察し、表現 している。	●	● ●		ワークシート ノート
3	○鎌倉時代の特色について、 御恩と奉公の関係、守護・ 地頭の設置、鎌倉幕府の仕 組み、承久の乱から理解す る。 ・平清盛の政治と比較し、源 頼朝が目指した政治につ いて考えさせる。 ・承久の乱前後の幕府の勢 力を資料から読み取らせ、 幕府の勢力が西国に拡大 したことを理解させる。	・鎌倉幕府の特色を理解し、 幕府政治が150年間続いた 理由を考察し、表現してい る。	●	● ●		ワークシート ノート
4	○鎌倉時代の武士や民衆の 生活について、武士の役割 や農業の発達に着目して 理解する。 ・武士の館や市場の様子を 資料から読み取らせる。 ・武士や民衆の生活の特色 を理解させる。	・鎌倉時代の産業発達から民 衆の生活が向上してきた ことを理解している。 ・鎌倉時代の武士が戦士であ るとともに土地の管理者 であるという点を、資料に 基づいて考察し、表現して いる。	● ●	○ ○		グループ活動 ワークシート ノート

5	<p>○鎌倉時代の文化や宗教の特色について、これまでの時代との違いに着目して理解する。</p> <p>・鎌倉時代の文化が、力強さや写実的であることから、武士の台頭の影響を受けていることを理解させる。</p> <p>・鎌倉仏教が現在も広く信仰されている理由を理解させ、民衆に広まった理由について考えさせる。</p>	<p>・鎌倉時代の文化や宗教にそれまでの貴族に加えて武士や民衆の姿が見られるようになる理由を、既習事項を基に考察し、表現している。</p>		● ●	● ●	ワークシート ノート 行動観察
6	<p>○武士が台頭し武家政権が誕生した過程についてまとめる。</p>	<p>・今までの学習を振り返り、武士が登場し、成長した理由についてまとめる。</p>		○ ○	○	グループ活動 ワークシート

6. 本時の指導（1/5）

（1）本時の目標

武士の存在について意見を出しあうなかで、武士はどのような存在・立場だったのかについて協力しながら資料を読み取り、今後の学習に見通しを持とうとしている。【学びに向かう力、人間性等】

（2）本時の展開

過程	学習活動と内容	教師の指導・支援	評価の視点
導入 5分	<p>1 前時の振り返りをする。 ※幸町第二中学校は幸町第三小学校と小中一貫教育を行っており、その一環として社会科では前時の振り返りをどの時間でも入れるようにしている。</p> <p>2 クラスメイトが武士に対してどのようなイメージを持っているかを確認する。</p>	<p>・TVのスライドを使って、前回の復習をする。</p> <p>・事前アンケートの「あなたは武士にどのようなイメージを持っていますか。」の結果をTVのスライドを使って示し、他の生徒が武士に対してどのようなイメージを持っているか共有させる。</p>	

	<p>3 TV に映された人物の画像から武士だと思う人物を選ぶ。</p> <p style="text-align: center; border: 1px solid black; padding: 5px;">初期の武士はどのような存在だったのだろう</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・平安時代～江戸時代までの武士の画像を TV に映し、生徒にどれが武士か選ばせる。 	
<p>展開 35分</p>	<p>4 ギガタブで「後三年合戦絵巻 巻下」を見て、武士はどのような存在だったのか予想する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 恐い存在 ・ 権力を持った存在 ・ 現在の警察や裁判所、税務署のような存在 <p>5 ギガタブで「粉河寺縁起絵巻」、「因幡堂薬師縁起絵巻」、「春日権現験記絵」、「平治物語絵巻」を見て、武士はどのような存在だったのか読み取る。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 館の警備をしている。 ・ 受領や法皇に従っている。 <p>6 5で読み取った武士の役割をもとに「粉河寺縁起絵巻」、「因幡堂薬師縁起絵巻」、「春日権現験記絵」、「平治物語絵巻」の武士をどのように成長していったかをグループで考え、古い順から並び替える。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ ワークシートを配布する。 ・ 「後三年合戦絵巻 巻下」を見て、武士とはどのような存在だったのか、ワークシートに記入させる。 ・ 武士の立場や役割について、貴族との違いに注目させながら、生徒の自由な予想を促す。 ・ 各資料を見て、武士がどのような役割を果たしていたのか、ワークシートに記入させる。 ・ 4で読み取った戦う存在という側面以外の武士の一面を読み取れるように促す。 ・ 1班5～6人で6班にクラスを分ける。 ・ 5で読み取った内容をもとに4つの資料の武士を古い順から並び替えさせる。 ・ グループによる話し合いを通して、積極的に自分の考えたことを伝え合うように促す。 ・ お互いの考えを共有させるために、各グループの発表に対して、「どこから？」と問い返し根拠を説明させたり、「どうして？」と問い返し理由について述べさせたりする。また、「どう思う？」と他の生徒につなげ、対話を促す。 	<p>○意見交換によって自身の考えを深めようとしている。【主体的に学習に取り組む態度】</p>
<p>まとめ</p>	<p>7 「千葉常胤物語」から平安期の武</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 千葉氏の相馬御厨・立花郷(後 	<p>○「武士はどのよ</p>

5分	士の役割・存在について確認する。	の橘庄) 割譲から、鎌倉幕府の成立に大きな役割を担った武士が平安期には貴族の家人などの低い身分や弱い立場だったことを確認する。	うな存在・立場だったのか」について、自分の考えを書いている。【主体的に学習に取り組む態度】(ワークシート)
8	ワークシートに今日の授業の振り返りを記入する。		

(3) 本時の評価

評価規準	基準		
	A	B	C
「武士はどのような存在・立場だったのか」について、友人の意見を受け入れ、参考にしながら、今後の学習の見通しをもとうとしている。【主体的に学習に取り組む態度】	◇ワークシートの回収 「武士はどのような存在・立場だったのか」について、まとめや小学校の既習内容を踏まえて新たな課題や疑問が書けている。	◇ワークシートの回収 「武士はどのような存在・立場だったのか」について、読み取った資料から自分の考えが書けている。	◇ワークシートの回収 「武士はどのような存在・立場だったのか」について、疑問や自分の考えを書いていない。 ※支援の手立て 教科書の重要語句を使って書いてみるように声掛けをする。

(4) 板書計画

<p>初期の武士はどのような存在だったのだろう</p> <p>○武士とはどのような存在？</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 恐い存在 ・ 権力を持った存在 ・ 現在の警察や裁判所、税務署のような存在 <p>○武士の役割とは？</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 都の武官……天皇・貴族の警備、犯罪の取り締まり ・ 地方の豪族…郡司や荘園の現地管理 警察や軍事などの治安維持 <p>〈まとめ〉</p> <p>初期の武士はあまり身分が高くなく、社会的に弱い立場の存在だった。</p>

7. 思考の構造図

【事実的認識の第3段階】

権力が統合されず、権力が分散すると、自力による生存が求められるため、土地を基盤とした主従関係や地域共同体が形成され、成長していくことが見られる。

【事実的認識の第1段階・第2段階】

- A 都の武官や地方の豪族たちが、朝廷や国府の役人になって、天皇の住まいや役所の警備、犯罪の取りしまりなどを担当したり、戦ったりすることで武士に成長した。
- 自分の領地を守るために武装した。
 - 一族や家来を従えて武士団を作った。
 - 武士が公領や荘園の徴税を請け負って、館を築き、地方社会の中心になった。
 - 平将門の乱や藤原純友の乱を源氏と平氏が鎮圧した。
 - 前九年合戦・後三年合戦で源氏が東日本、奥州藤原氏が東北に力を持った。
- B 平氏政権は武力を背景に貴族の政治と同じ手法を取り、天皇との婚姻関係を結ぶことで太政大臣となり、実権を握った。
- 院政とは、上皇や法皇が天皇に代わって政治を行うことである。
 - 平清盛が保元の乱・平治の乱に勝利した。
 - 平清盛が武士として初めて太政大臣となった。
 - 平氏政権は多くの荘園や公領、日宋貿易を支配した。
 - 平清盛は娘を天皇の后にして権力を強め、朝廷の政治の実権を握った。
- C 将軍と御家人は土地を仲立ちに御恩と奉公の関係を結び、鎌倉幕府は治安維持の担当者として守護・地頭を設置した。
- 国ごとに軍事・警察を担当する守護、荘園や公領ごとに現地を管理・支配する地頭を置いた。
 - 源頼朝が本格的な武士の政権である鎌倉幕府を開いた。
 - 将軍は御家人と土地を仲立ちにした御恩と奉公の関係を結んだ。
 - 執権政治とは北条氏が執権という地位を独占し、執権を中心とする有力な御家人の話し合いによって行われた政治のことである。
 - 承久の乱に勝利した幕府は、京都に六波羅探題を置いた。
 - 北条泰時が政治の判断の基準となる御成敗式目を定めた。
- D 荘園や公領の地頭は、板葺きの住まいで、質素な生活を送り、武芸によって心身を鍛えていた。
- 荘園や公領の地頭は板葺きの住まいで、質素な生活を送った。
 - 武士は馬や弓矢の武芸によって心身を鍛え、「弓馬の道」や「武士の道」などと呼ばれる、名誉を重んじる恥を嫌う態度や、武士らしい心構えが育っていった。
 - 同じ田畑で米と麦を交互に作る二毛作が始まった。
 - 寺社の門前や交通の便利な所には定期市が開かれ、人々が集まって町が生まれた。
- E 鎌倉時代の文化は平安時代の文化を受けつぎつつ、宋の文化や武士の好みを反映した写実的で力強い文化である。
- 運慶らは力強い金剛力士像を作った。
 - 「新古今和歌集」や「平家物語」、「徒然草」が書かれた。
 - 民衆や武士の心のよりどころとして、鎌倉仏教が起こった。

初期の武士はどのような存在だったのだろう

組 番 氏名 _____

1. 「後三年合戦絵巻」を見て、武士とはどのような存在だったのか、考えて書きましょう。

武士は	な存在
理由	

2. 武士にはどのような役割があったのか、各資料から読み取り書きましょう。

資料名	武士の役割	理由
①「粉河寺縁起絵巻」		
②「平治物語絵巻」		
③「春日権現験記絵」		
④「因幡堂薬師縁起絵巻」		
参考になった 友だちの意見		

3. 授業の振り返り

今日の授業を踏まえて、知りたいことや疑問を書いてみましょう。また、そのことについて予想を書ける人は予想も書いてみましょう。